

# 二人静

世阿弥作

前

ワキ

勝手の神職

シテ

ツレ

菜摘女

シテ

里女

後

ワキ

前に同じ  
ツレ

シテ

静

季は  
地は  
正月

「是は三吉野勝手の御前に仕へ申す者にて候。さて  
も当社におき御神事さまぐ御座候ふ中にも。正  
月七日は菜摘川より若菜を摘ませ神前に備へ申し  
候。今日に相当りて候ふ程に。女どもに申し付け。  
菜摘川へ遣はさばやと存じ候。とうく女どもに  
菜摘川へ出でよと申し候へ。

ツレ一声  
「見渡せば。松の葉白き吉野山。幾世積りし雪なら  
ん。

サシ  
「深山には松の雪だに消えなくに。都は野辺の若菜  
摘む。頃にも今やなりぬらん。思ひやるこそゆか  
しけれ。

歌  
「木の芽春雨降るとても。く。猶消え難き此野辺  
の。雪の下なる若菜をば。今幾日有りて摘まゝし。  
春立つと。云ふばかりにや三吉野の。山も霞みて  
白雪の。消えし跡こそ道となれ。く。  
シテ詞  
「なふくあれなる人に申すべき事の候。

ツレ詞  
「如何なる人にて候ふぞ。

シテ 「三吉野へ御帰り候はゞ言伝て申し候はん。

ツレ 「何事にて候ふぞ。

シテ 「三吉野にては社家の人。其外の人々にも言伝て申し候。あまりに妾が罪業の程悲しく候へば。一日経書いて我跡弔ひてたび給へと。よく／＼仰せ候へ。

ツレ 「あら恐ろしの事を仰せ候ふや。言伝をば申すべし

さりながら。御名をば誰と申すべきぞ。

シテ 「まづ／＼此由仰せ候ひて。もしも疑ふ人あらば。其時妾御事につきて。委しく名をば名乗るべし。かまへてよく／＼届け給へと。

地 「夕風迷ふあだ雲の。憂き水茎の筆の跡。かき消すやうに失せにけり。／＼。  
(中入)

ツレ詞  
「かゝる恐ろしき事こそ候はね。急ぎ帰り此由を申さばやと思ひ候。如何に申し候。唯今帰りて候。

「何とて遅く帰りたるぞ。

ツレ「不思議なる事の候ひて。遅く帰りて候。

ワキ「さていかやうなる事ぞ。

ツレ「菜摘川の辺にて。何くともなく女の来り候ひて。あまりに罪業の程悲しく候へば。一日経書いて跡弔ひて賜はれと。三吉野の人。取り分き社家の人々に申せとは候ひつれども。誠しからず候ふ程に。申さじとは思へども。なに誠しからずとや。うたてやなさしも頼みしかひもなく。誠しからずとや。唯よそにてこそ三吉野の。花をも雲と思ふべけれ。近く来ぬれば雲と見し。桜は花に顯はるゝ物を。あら恨めしの疑ひやな。

「言語道断。不思議なる事の候ふ物かな。狂氣して候ふは如何に。さて如何やうなる人の付き添ひたるぞ名を名乗り給へ。跡をば懇に弔ひて参らせ候ふべし。

ツレ「何をか包み参らせ候ふべき。判官殿に仕へ申せし者なり。

ワキ「判官殿の御内の人は多き中にも。殊に衣川の御最期まで御供申したりし十郎権頭。

ツレ「兼房は判官殿の御死骸。心静かに取りをさめ。腹切り焰に飛んで入り。殊にあはれなりし忠の者。されどもそれにはなき物を。誠は我は女なりしが。此山までは御供申し。こゝにて捨てられ参らせて。

絶えぬ思ひの涙の袖。

地「つゝましながら我名をば。静かに申さん恥かしや。

ワキ詞

「さては静御前にてましますかや。静にて渡り候はゞ。かくれなき舞の上手にて有りしかば。舞をまうて御見せ候へ。跡をば懇に弔ひ申し候ふべし。ツレ「我着し舞の装束をば。勝手の御前に納めしなり。ワキ「さて舞の衣裳は何色ぞ。

ツレ「袴は精好。

ワキ 「水干は。

ツレ 「世を秋の野の花づくし。

ワキ詞 「是は不思議の事なりとて。宝蔵を開き見れば。實に／＼疑ふ所もなく。舞の衣裳の候。是を召されとく／＼御舞ひ候へ。静御前の舞を御まひ有るぞ。皆々寄りて御覧候へ。

ツレ 「實に恥かしや我ながら。昔忘れぬ心とて。

ワキ 「さもなつかしく思出の。

ツレ 「時も来にけり。

ワキ 「静の舞。

ツレ 「今三吉野の河の名の。

後ジテ 「菜摘の女と思ふなよ。

地 「川淀近き山陰の。香もなつかしき袂かな。

二人 「さても義経凶徒に準ぜられ。既に討手向ふと聞えしかば。小船に取り乗り。渡辺神崎より。押し渡らんとせしに。海路心に任せず難風吹いて。も

との地に着きし事。天命かと思へば科なかりしも。

「科有りけるかと。身を恨むるばかりなり。

クセ 「さる程に。次第々々に道せばき。御身となりて此

山に。分け入り給ふ頃は春。所は三吉野の。花に宿かる下臥も。長閑ならざる夜嵐に。寝もせぬ夢と花も散り。まことに一榮一落。まのあたりなる浮世とて。又此山を落ちて行く。

二人 「昔し清見原の天皇。

地 「大友の皇子に襲はれて。彼山に踏み迷ひ。雪の木

陰を。頼み給ひける桜木の宮。神の宮滝西河の滝。

我こそ落ち行け。落ちても波はかへるなり。さる

にても三吉野の。頼む木陰の花の雪。雨もたまら

ぬ奥山の。音さわがしき春の夜の。月は朧にて。

猶足引の山深み。分け迷ひ行く有様は。

二人 「唐の。佐国は花に身を捨てゝ。

地 「遊子残月に行きしも。今身の上に白雪の。花を踏

んでは。同じく惜しむ少年の。春の夜も静かなら  
で。さわがしき三吉野の。山風に散る花までも。  
追手の声やらんと。跡をのみ三吉野の。奥深く急  
ぐ山路かな。

地「それのみならず憂かりしは。頼朝に召し出ださ  
れ。静は舞の上手なり。とくくと有りしかば。  
心も解けぬ舞の袖。返すべくも恨めしく。昔恋し  
き時の和歌。

二人「賤やしづ。(舞)

ワカ「賤やしづ。賤の苧環繰り返し。

地「昔を今になすよしもがな。

二人「思ひかへせばいにしへも。

地「思ひかへせばいにしへも。恋しくもなし憂き事の。

今も恨みの衣川。身こそは沈め名をば沈めぬ。

二人「武士の。

地「物毎に浮世のならひなればと。思ふばかりぞ山桜。

雪に吹きなす花の松風。静が跡を弔ひ給へ。



底本：国立国会図書館デジタルコレクション「謡曲評釈 第六輯」大和田建樹著